九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

元代水墨人物画の研究 ： 画僧による作品を中心に

李, 宜蓁

https://hdl.handle.net/2324/7329380

出版情報：Kyushu University, 2024, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

KYUSHU UNIVERSITY

（様式３）

氏　　名　：李　宜蓁

論 文 名　：元代水墨人物画の研究―画僧による作品を中心に―

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、元の水墨人物画についての専論である。水墨人物画は唐末五代初に成立した絵画の一ジャンルであるが、北宋以前の作例がほとんど残っていないのに対し、南宋と元の作例が数多く現存し、研究が進められてきた。水墨人物画とは、狭義には、肉身が細筆で、衣紋が墨面に近い粗筆で描かれた筆と墨とを造形の根本とする一連の作例となるが、広い意味では、水墨の表現の可能性を妨げない淡彩画、肉身と衣紋を太さの異なる線のみで描き分ける白描画も水墨人物画に準じている。南宋と元における水墨人物画の作例は、作品の主題および作者や着賛者の社会性や活動地域から、中国の江南禅林周辺で制作されたものが多数を占めていることが知られているが、先行研究は、これらの水墨人物画を一括りに扱ってきた傾向が強い。しかし、宋元交替期に伴い江南禅林をはじめとする仏教界も大きく変容を遂げていたはずであり、本論文は、元時代における水墨人物画を一連の南宋画から区別する前提から、その特性を捉える点に特色がある。

本論文は、元の画僧による水墨人物画を主な研究対象とする。画僧は禅林をはじめとする仏教界の一員であり、当時の仏教界の動向を鋭く察知できたが故に、画僧による水墨人物画は在俗の画家と比べ、当時の仏教界の動向と密接に連動しているからである。本論文でとりあげる画僧は、雪菴（生没年不詳）、絶際永中（生没年不詳）、因陀羅（生没年不詳）、黙菴（？～約1345）の四人である。そのうち雪菴は、金末に華北で創立され、元に江南へ進出した民間仏教である頭陀教の教主であり、絶際は、江南の中峰明本（1263～1323）を中心とする幻住派の禅僧である。また因陀羅は梵僧といわれ、黙菴は1330年代に入元した日本僧であるが、両者はいずれも絶際と同様に当時の江南禅林と深い関わりをもつ禅僧である点で注目される。

本論文は、これまで見過されてきた三つの新たな観点から、元の画僧による水墨人物画を再考した。第一に、従来の研究は画風分析が中心であったが、本論文では作品の制作文脈を明らかにし、画風の由来だけではなく、図像の表現と賛文の内容を併せて考察した。第二に、先行研究が江南禅林を単一のまとまった存在として捉える傾向が強いのに対し、本論文では、作品とその制作背景に関わった江南禅林内外の宗派との関係性を明らかにした。第三の観点として、本論文では、文人画家による作品との比較を行った。先行研究では、元の画僧による水墨人物画は、画風上の独自性を保っていると理解してきた。しかし、元の仏教界において、各宗派の僧侶は、文人をはじめとする在俗信者と頻繁に交流があり、また少なからず文人的素養を有していたことから、画僧の作品も、当然ながら、多かれ少なかれ文人画を受容していた。

本論文は第一章から第四章までの本論に、序論と結論を加えた六章で構成されている。本論では、各画僧の活動年代に基づき、第一章で雪菴筆「羅漢図冊」（静嘉堂文庫美術館）、第二章で絶際筆「白衣観音図」（クリーヴランド美術館本）と絶際の伝称を伴う二点の「白衣観音図」

（東京・個人、大阪・個人）、第三章で因陀羅筆「観音図」（個人）、第四章で黙菴筆「布袋図」（MOA 美術館）について考察した。このなかで、第一章で論じた雪菴は頭陀教の教主であり、彼が自画自賛した「羅漢図冊」は江南禅林外部で制作された水墨人物画として理解される。第三章で論じた「観音図」は、禅僧である因陀羅が、教僧である千仏法師のために描いた作品であり、かつ禅僧・中峰が撰した内容を律僧・虎巌嗣良が写した賛文を伴っている。これらの作例は、教僧・禅僧・律僧の交流を背景として制作された水墨人物画となる。そして、三点の「白衣観音図」は中峰の款記をもつ賛文、「布袋図」は古林清茂の法嗣である了菴清欲による賛文を伴っており、それぞれ幻住派、および古林を中心とする「金剛幢下」という江南禅林にあっても異色の宗派ともいうべき文化的背景に根ざした作品である。

本論文では、雪菴を含む四人の画僧による作品と、その制作背景に密接に関わった仏教宗派との関係性を分析し、元の江南禅林の内外で制作された水墨人物画の諸相を明らかにするものである。第一章では、雪菴が従来主に江南禅林で制作されてきた水墨人物画の伝統を活かし、頭陀教の教義や発展を反映した「羅漢図冊」を制作し得た状況を解明した。第二章では、三点の「白衣観音図」から、絶際が自ら所属した幻住派の教義を反映する水墨人物画を制作していた実態を明らかにした。第三章では、依頼者と着賛者が禅僧でない場合に、因陀羅が自らの禅宗信仰と、依頼者・着賛者の仏教信仰とを如何に折衷しながら「観音図」の制作を行ったのか明らかにした。第四章では、江南禅林を転々とした黙菴が、了菴の会下で描いた MOA 美術館所蔵の「布袋図」と金剛幢下の理念や発展との関係性を解明した。

総じて、元の水墨人物画の主な特色については、次のように挙げることができる。一つ目は、元の水墨人物画がしばしば新たな図像の表現を取り入れ、画家または依頼者が所属した宗派の教義を示したことである。二つ目は、元の水墨人物画に内包されている宗教性が、画家や依頼者の所属宗派によって異なる様相を呈していることである。三つ目は、「観音図」を除き、「羅漢図冊」・「白衣観音図」・「布袋図」にはいずれも文人画の描き方や理念を受容した形跡がみられることである。この点に注目すると、元の画僧による水墨人物画には、文人居士向けの作例が少なからず含まれていることがわかる。